

心身共に強く逞しいこどもに

青 木 勇 三

1 弱いこども

戦後のこどもは戦前に比べて、体位は向上したが体力は低下したと言われ、一般世間の人々もそのことを認めるようになってきている。身長体重など著しく増大し、ミュンヘンオリンピックに出場した日本選手の身長など外国選手に見劣りしない立派なものになったと思う。けれどもモヤシっ子と呼ばれるひよろ長いかにもひよわなこどもや「肥満児」と呼ばれる運動不足で栄養過多のこどもを実に沢山見かける。肥満児は都会地程多く、年々増加する大人の肥満体も大きな問題となりつつある。

汚染された大都市への人口集中でそのこども達の顔色は青白く、それに比べて公害の少ない都市周辺のこどもは色艶がよく、更に田舎になるほど健康色である。都市のこどもは年齢相応の距離を走らせても途中で落伍する者が多く、完走する者が戦前よりはるかに少なくなっている。体操の腕立や鉄棒の懸垂で肘の屈伸ができない者が非常に多い。

肉体的のみならず精神的にも辛抱強さが無い、忍耐力が無い、根性といったものがみられない、力強さ、ファイトといったものが感じられないこどもが実に多くなったように思われる。それがやがて青年の三無一無気力、無関心、無責任と言われることにもつながっているのではなからうか。

次の時代をになう青少年が逞しい精神力と頑健な体力の持主になってもらいたいと親も社会も願っている筈である。否、力強い頼もしいこどもに育てあげることが大人の重大な責任だと思う。将来の日本を背負って立たねばならないこどもがこれでいいのだろうか。寒心に堪えないことである。

2 過保護

こどもに逞しさが見られない、頑丈なこどもを見るのが少なくなったということは多くの人が認めることと思う。しからばいかに改善したらよいか。残念ながら積極的な論議は少なく消極的な予防策が専ら提唱されているに過ぎないように思う。否、消極策どころではない。こどもに対して余りにも家庭がそして社会が過保護ではないだろうか。刃物を持っては危ない、池へ行ったら危ない、ああしてはいけないこうしてはならないと言って、こども達を見えざる格子の中に閉じこめているような気がする。自然動物園と称するところでも、そこで生れ育ったライオンは給餌されることに習慣づけられて、自ら獲物を探し求める能力を失ない、贅肉のついた無恰好な姿となり百獣の王らしい威厳はないという。過保護のこどもの行末が動物園のライオンのようになっては大変である。

幼少年の指導に当たっている先生方はこどもに怪我をさせないように風邪などひかせないようにとそのことに一番神経をとがらせていると言われる。学校での一寸した怪我でも親が学校の管理に文句をつけ責任を追求しはては賠償を請求する始末だという。従って先生の方では只管一寸の怪我也させないようにと極めて消極的な指導になるという。細心の注意を払えば積極的に体力の増強になる運動種目と信じながら、又かつてはそれを実施した

経験を持ちながら、万一を恐れ父兄の動向を気にして消極的になるんだと言われる。テレビ映画に次のような一コマがあった。こどもを心身共に逞しい人間に育てあげようと情熱を傾けている一人の教師がある日の朝礼時全校生に校庭周囲を走らせたところ、こどもがバタバタ倒れて大騒ぎとなり静養室へかつぎこむ校医が急遽かけつける、遂にPTA役員が集ってきて学校当局を責めるといった場面である。平常鍛えていたのでその教師のクラスからは一名の落伍者もでなかったし、平素全校生から慕われ、職員間にも人望のあった教師だったが、自ら職を退く羽目になったとえがかれていた。

海水浴は全身の運動で夏期最高の運動だと思うが、近頃学校行事の臨海学習が年々減って行きつつあるという。大都会地では段々遠隔地へ遠隔地へと行かなければ好適地が得られなくなったという理由と共に、命にかかわる万一の事故を恐れてだと言われている。今夏お茶大附小の二少年が佐渡ヶ島新潟間を泳ぎきったということが希有のこととしてテレビで報じられていた。確かに賞讃する素晴らしいことではあるが、以前は遠泳が盛んに行われて体力と共に忍耐力持久力の涵養に大いに役立てられていたのである。

年々の公費助成ですべての学校にプールが施設される日も遠くないかも知れない。しかし青い海うまい空気白砂青松の臨海教育の何分の一の効果がプールで得られるだろうか。プールがあった方が勿論よい。けれども海とプールをおきかえてはいけないと思う。夏期父親の休日に一家揃って往復長時間乗物のラッシュにもまれて海浜の芋を洗うような雑沓の中で海に入り又汗ダクダクになって帰宅するこどもは九月始業時学校で肩身が広いのだろうが海へつれていってもらえなかったこどもの方が遙かに多いのではなからうか。すべてのこどもが毎年きれいな海で一週間か十日位臨海学習できるようになりたいものである。海水浴は冬にも風邪などひかなくなるという効果観面であるのは勿論心身を逞しくする最も優れた夏期の運動だと確信する。

教室では俯いて小さくなっている子が休み時間に校庭へ出ると俄然元気一杯暴れまわっている。その子には教室でもその元気が出るよう教師の苦心が要ると思うが、同時に全部のこどもが一人残らず運動場で飛んだり跳ねたりして思う存分遊ぶようにしむけたいものである。

体育の時間にも全部のこどもが十分に運動できるようにして欲しい。よく見かける場面に一人宛何か器械など使ってやらせ残り全部はそれを見学してる風景がある。折角の心身鍛錬の時間にこども各人はわづかしか身体を動かしていないのである。一斉にやらせると目がとどかなくて怪我をさせては大変という潜在意識が働いているのではと邪推したくなる。

自然観察、芋堀り、栗拾い、史跡見学等々努めてこどもを野外に連れ出してやりたい。遠足という名のもとにバスで行ってバスで帰ってくる。遠くまで足を運ぶことはしない。交通ラッシュのところは仕方がないとしても乗物の少なくなった地点から先は大いに歩かせるようにしたいものである。

今日の学校体育は余りにも体育館中心に傾きすぎているように素人には思われてならない。炎熱をさけ風雪をよけて良好なコンディションで技を競うにはよいかも知れない。けれども酷暑に堪えての運動に忍耐力を養ない風雪を冒しての運動に勇猛心を培かう如き精神力の養成にはならない。さんさんと降り注ぐ太陽光線の下大地に足をつけて緑の草木に囲まれた運動場でこどもの体育や遊びが行われたいものである。

● 万歩クラブ、ママサンバレー、年々盛んになる体育の日の行事、町民運動会、週休二日制を善用しての社員やその家族の運動会や健康テストなど所謂社会体育も漸く隆盛になる兆しを示してきたことは喜ばしいことである。そうなればこどもの体育も隆盛になる誘引ともなるであろう。それにしても野外の体育施設やそこでの指導者養成に為政者の努力が強く望まれてならない。

● 親や社会が一寸の怪我でも厳しく責めたてる風潮になったので、学校側では体育や体育行事の際只管安全を念じて消極的になっている。家庭も学校も余りに過保護に陥り、しかも家庭教育社会教育の場面で分担すべきことをも一切をあげて学校教育に押しつけているように思われてならない。教育という仕事は学校、社会、家庭が一体になって当ることによって始めて十全の効果をおさめることができる。家庭で年令相応のわが子の自立的行動、お手伝いなど親の真の愛情の中に育てられていかなければならない。早く幼稚園へ預けてしまいたい、できるだけ保育時間の長い保育所を探そう、そしてわが子の教育一切を学校にお願いするんだというのでは困る。教師が家庭生活でこどもはかくあらねばならないといくら繰り返し話しても所詮間接の説話であって親が直接実践指導をしなければならぬことである。社会教育についても同断である。

● 頑丈な体力を作るには単に運動を盛んにすればよいというのではない。保健衛生に注意し栄養に配慮しなければならぬこと論をまたない。而してこれらに関して学校のなし得ることはその一部である。親が注意し社会が配慮しなければならぬことが大部分であるかも知れない。

● 親も社会もこどもの教育一切を学校に任せしかもその全体が余りに過保護の様相になっていることは是非共改められねばならないと強調するものである。

3 こどもの遊び場

さてこどもは学校から帰るとおやつを食べてすぐ外に遊びに出たいのである。大人はこどものとき遊びまわったことを想い起して欲しい。ところが今は道路を車に占領されて遊ぶところではない。大人は歩く代りに車を使うのだからまだいい、だがこどもは遊び場一昔は道路で遊んでいた一を奮われおまけに生命の危険にさらされている。

● 敷地一杯に建てられた幼稚園舎で床を高くして薄暗い地下室みたいな所が園児の遊び場になっていたり、高速道路の下が遊び場になったりして、実にかわいそおな気がする。こどもの遊び場は次々に作られてはいるが、密集住宅の急速に増加する勢いには追いつかない状態ではなかろうか。遊び場の近くのこどもは利用できても、遠く離れていて利用できないこどもが大多数ではなかろうか。日曜日祝日あるいは夏休みなど長期の休日にも海へも山へも連れて行ってもらえないこどもが大部分ではなかろうか。会社の厚生施設に山荘や海の家があっても、父親がでかけるだけで妻子は光化学スモッグに怯える家に閉じこめられているのが多いのではなかろうか。セカンドハウスは自分のゴルフ用で、こどもの健康増進には無関心な親も多いと思う。親の心がけ次第で一家の経済に応じて主婦の作ったおにぎりを持って平凡な丘や小川へ行くことはできると思う。多数が殺到する名所旧跡あるいはレジャー施設へでかける必要はない。後者の方が遙かに健康増進に役立つこと間違いないのである。

● こどもの遊びを妨げる今一つが学習塾のたぐいである。幼稚園や小学校低学年の時はピ

アノ、習字、そろばんなどの教室、さては芸能のおけいごとに、こどもが学校から帰ると親がおいたてるようにして毎日毎日やらせている。上級になると所謂学習塾へやり夜は家庭教師を迎えるという有様、幸にして近くに遊ぶ場所があっても遊ぶ時間が与えられないのである。こどもの才能が如何なる方向にあるかをみきわめない、専門の人に相談もしないで、隣りの子が行くから、あの子に負けてなるものかと親の虚栄や競争心からこどもを痛めつけているのである。特に恵まれた才能があれば週に一回位はいいだろうが、外の日は大いに遊ばせてやりたいものである。

このようなこどもの中から素直に親の命に従って中高と進み大学生になる頃、学業を放擲してこどもの時でできなかった遊びを取り返そうとするかの如く脱線する者がでてくるのかも知れない。又塾にやらされるのを嫌がって親にかくれて遊びまわっていた子がやがて不良仲間の誘惑にひっかかるのかもわからない。

乳幼児の発達心理学や大脳生理学の進歩によって、運動機能の発達段階や成熟期は可なり詳しく知られるようになってきている。その適期を逸するとその機能は未発達に了りいわば不具者になってしまう。こどもは遊びの間に自然にその機能を体得していくのである。毎日こどもを塾に追いやって可愛い我が子を一生不具者に行っているのである。

こどもの遊びは大人の遊びとは違う、大人の仕事に匹敵するものである。こどもは遊びによって自ら心身を作りあげて行くのである。

遊び場のないこども達を地域毎休日にはバスで清浄な遊び場へ送りこんでやる工夫はできないものだろうか。

都市と農村で姉妹学校関係を結び休日には都市のこどもは農村の学校を拠点として山野河沼を遊びまわれるようにできないものだろうか。

教室や学校内の授業は五日制にして土曜日は自然に親しめる郊外に行って楽しく遊べるようにしてやれないものだろうか。

4 公害汚染

公害汚染はまだまだ増大拡散している。ストップさせる世論は高く、防止の施策は漸次進められてはいる。しかし汚染物質排出のパーセンテージこそ次第に下げられても、今迄に蓄積されたものに加算されて総量は増加の一途をたどっている。有害な物質を化学的に又物理的に除去する試みも僅かながら始まってはいるが、海や河の自浄力はその限界を超えて瀬戸内海の如き死の海になろうとしている。これを昔のきれいな海にかえすには半世紀はかかるだろうと言われている。美しかった山や川が工場進出、住宅団地建設レジャー施設等々で日に日に破壊され自然の生態的バランスがくずされてある生物は絶滅し、ある生物は異状発生する。人類もその生物の仲間である。現状は人類が滅亡する方向に進んでいるのではないかという危惧をいだかせる。世界の人口が加速度的に激増しつつある問題と併わせ考えるべきことと思う。

自然科学研究の成果は真実で貴いものではあるが善用も悪用もできる。原子力の発見は偉大ではあるが、その平和利用が人類の幸福につながるのであって、軍事利用について米ソその他の間の制限乃至禁止交渉が遅々として進展しないのは誠に残念なことである。

地球の歴史は氷河期などの変遷による生物の興亡を教えている。人間の智慧—科学的研究発見—による全人類の滅亡ということを深酷に憂慮しなくてもよいのだろうか。古今の

歴史は民族や国家の興亡を示しているが人類全部の滅亡が起らないという保証はない。国際的な環境改善や海洋汚染防止の会議など次々に開かれ、厳しいマスキー法の規制をほぼそのまま取り入れたものが日本でも実施されようとしてはいる。東京都公害対策委員長戒野さんは今の状態を野放しにしておけば昭和六十年頃には都民は防毒マスクをつけて暮さなければならないと警告して規制措置に県命である。

九月になるとキンモクセイの香りが遠方からただよって来てひかれながら近づいて行く散歩は楽しいものである。今や大都市周辺では公害に汚染されてその花が咲かなくなり、咲かない範囲が年々広がっている。水や空気は流動拡散しているのだから汚染物質は水の流れのまにまに、そして吹く風と共に日本中否、世界中に広がっている。汚染物質やゴミを世界で一番広い大太平洋に投棄しているがこの海洋とて無限ではない、自浄力にも限度があることを思わねばならない。

産業界もそして為政者も漸くにして生産第一から福祉優先の姿勢に変わって来た。今にして公害汚染源を根絶しなければ人類破滅の危機に直面すると思う。抵抗力の弱いこども達の健康は殊に憂慮に堪えない。今はまだしも清浄な田舎で都会のこどもを一年思いきって遊ばせてやりたいと極端なことも言いたくなるのである。

(本学研究紀要第二号筆者所論)

5 結語

人間の体位や体力は本質的には民族的遺伝だと漠然信じられてきたが実は栄養と運動と環境によって決まることが知られるようになってきた。戦後のこどもの体位向上は食糧が豊富になり充分に栄養が摂取できるようになったからである。しかし親や社会の過保護が災いして消極的な体育が行われこどもは塾に追いやられて遊びの時間を奪われ強靱な体力が養われない現状である。その上公害汚染によって日に日に悪化する環境がこれに拍車を加えている。

大人は先輩が営々として築きあげてくれた高度の学術文化産業経済等々を次代を背負うこども達に伝達して、更に一層の発展向上を願っている。残念ながらそのこども達は体力気力に欠けてる者が多い。是非とも心身共に強く逞しい人間に育ててやらねばならない。過保護を反省し大いに遊ぶ時間と場所を工夫しなければならないと思うのである。

美しい世界の公園と称されたこの国土を汚染させて公害の充満する山河にしてしまった。日本列島の改造は清明な環境を復元することが第一義でなければならない。その清浄な環境の中で心身共に健やかなこどもが育つ。

心身共に強く逞しいこどもを育てたいと切に切に願うものである。

高松短期大学研究紀要

第 3 号

昭和48年2月28日印刷

昭和48年3月5日発行

編集発行 高松短期大学
高松市春日町960

印刷 新日本印刷株式会社
高松市木太町2158